

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 コウ イクテイ 黄 毓婷

本論文「植民地作家翁鬧（オウドウ）再考——1930年代の光と影」は、日本統治下の1910年台湾に生まれ、1940年頃、日本において客死したと推定される日本語作家翁鬧を対象としている。とりわけ彼の小説作品群の徹底的な読解を通じて、1930年代の台湾文学と日本文学の双方を射程に捉えながら、その文学的価値を再解釈しようとする意欲作である。

翁鬧は台湾文学研究の中では決してメジャーな存在ではないが、近年台湾における研究、とりわけその経歴や一次資料に関する研究蓄積は徐々に進み、それなりに彼をめぐる解釈共同体が形成されつつあるといえる。三十歳前後で客死し、わずか六、七年の執筆活動しかできなかった翁鬧に関しては残存する資料が少なく、同時代の関係者が語ったものが、貴重な証言になる一方、それがその後の翁鬧像の定着に大きな影響を与えてきた。とりわけ、同時代の作家・劉捷が翁鬧を「純文学新感覚派」と定義したことによって、その後の翁鬧解釈が決定づけられ、「モダン」や「新感覚派」といった特定の語彙と文学史的な脈に則った解釈が、同語反復のように繰り返されてきたと、黄氏は指摘する。この現象のもう一つの要因は、1987年に戒厳令が解除された後、いわゆる「台湾文学」の自立性を確立するために、戦前の台湾人作家を既成の文学史のキーワードとうまく絡み合わせて、あたかも自明な「台湾文学史」に位置づける作業が急がれたこととも関連する。筆者はこうした翁鬧研究における、とりわけ作品論の問題点を十分に認識することから出発し、以下の論点によって、新たな解釈や資料を提供することを目的としている。

本論は序章と終章を別として、全体が二部（全四章）で構成されており、第Ⅰ部「翁鬧の生涯」、第Ⅱ部「作品再考」という部立てにより、ゆるやかに年代を追って作品論が読めるようにも工夫されている。

先ず第Ⅰ部第一章では、わずか数年で途絶した翁鬧の作家活動の全作品二十四作（小説、詩、随筆、討論会記録、文芸批評等含む）に関して、別途資料集にて現在では入手困難な原テキストを全て提示しながら、その傾向を分析しつつ、翁鬧の複雑で謎の多い生涯と絡めた説明を試みた。ここでは台湾における作家研究の先行成果と問題点も、整理されている。

次に第Ⅰ部第二章は、1935年4月発表の随筆「東京郊外浪人街」を題材にし、ここに言及される高円寺界隈の様子と文士の実名を手がかりに、当時の東京郊外、とりわけ高円寺駅を中心に、なぜ「浪人街」という特殊なトポスが成立したのかについて論じた好論である。「高円寺界隈」という場はすでに日本の文学的記述や同時代の人々の回想録において散見され、あたかも明確な境界を持つ空間のごとく扱われてきた。しかし筆者独自の調査によって、1930年代の左翼大弾圧の下で姿を消していたプロレタリア作家やアナキストたちの棲家が、中央線沿線の中でも、西の荻窪や阿佐ヶ谷より、杉並区の高円寺と新宿に近い淀橋区に集中していたことが判明した。外地出身の青年・翁鬧だからこそ微妙なまでの筆致で描き得た周縁者の意識とニヒリズム——筆者はそれこそが、その後の翁鬧の作家活動のいわば倫理的立ち位置であることを示すことに、本章で成功している。

本論文第Ⅱ部第三章は、これまでとかく「モダニズム」あるいは「新感覚派」の作家として評価されていた翁鬧を別の観点から検証するため、実際に彼が発表した七篇の小説のうち、農村を背景にしている三篇（「贛（ゴン）爺さん」、「哀れなレイ婆さん」「羅漢脚（ロオハンカア）」）が扱われる。筆者はこれを「農村物」と呼称し、1930年代日本文学における「農民文学」というジャンルを参照することによって、これまでと全く違う解釈を試みている。小説「贛爺さん」は、改造社の雑誌『文芸』の選外佳作に選ばれた作品であり、翁鬧自身が一時期中央文壇への進出を夢見ていたことも類推される。かといって翁鬧の文学作品の複雑さは、台湾における「郷土文学」にも、日本に

おけるプロレタリア文学や農村文学にも、最終的には与することのない独自の地平を目指しているという斬新な見方を、筆者は示している。本章後半ではさらに、「農村物」のテキスト内部における日本語方言の使用法について、それが翁闢独自のいわば言語的実験にもなっていることが、先行研究にはまったく無い視点として論じられた。

最後に第Ⅱ部第四章で論じられるのは、翁闢最晩年の作品三編である。とりわけ、近年台湾の研究者たちによって発見された作品——詩「征け勇士」および新聞長編小説「港のある街」に対する精緻な作品解釈は、本博士論文の最後に置かれるにふさわしい。筆者は、初出雑誌が未だに（発見者以外には）非公開である現状の中、中国語訳と共に刊行された翻字テキストの明らかな誤りを丁寧に指摘したうえで、先行研究の解釈に大きな変更を加えた。「港のある街」は、翁闢が最晩年に潜伏していたと推定される神戸が舞台になっている。「東京郊外浪人街」同様、都市論の手法を一部用い、戦前の新聞、地図、郷土史資料および観光案内書を詳細に調査した結果、同小説の至るところに神戸の地理的・歴史的な事実が溶かし込まれていることが明らかになった。そこに潜むもっとも重要な事実は、主人公・谷子の育った「風呂ノ谷」という場所が、現在では存在しない神戸の被差別部落であり、この長編小説が、周縁者・谷子の復讐劇として読み解けるということである。筆者は、この小説を最後に行方不明となってしまった作家の、あり得たかもしれない方向性の一つに、優れた通俗文学作家としての側面を見いだしている。

審査会ではまず一致して、日本統治下の台湾に生まれ二言語使用者の葛藤を抱えながらも、優れた日本語作家であった翁闢について、日本で初めてまとめた論考を完成させた点、とりわけ「東京郊外浪人街」「征け勇士」「港のある街」等への新しい作品解釈において、黄氏のすぐれた調査能力と粘り強い読解力が駆使されて得られた成果について、高い評価が与えられた。

ただし、翁闢がわずか数年の作家活動しか為せなかったことによる難点は、研究にも影響がないとはいえ、例えば「農村物」小説と1930年代日本文学や文壇との関係がより精緻に関係づけられる必要性、最終的に翁闢の作品群の文学史上の価値付けをどのような符牒で語るべきなのか、翁闢テキストにおけるリアリズムとフィクションとの関係の査定等々、詰めなければならない課題が山積していることも、具体的に指摘された。

しかし以上の指摘は、あくまでも今後の進展への希望として語られたものであり、本論文の価値を損なうものではない。従って、以上の審査結果を踏まえて、本審査委員会は全会一致で、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。